

## 行為と因果性

星野 徹

風に吹かれて木の葉が舞うときの木の葉の動きは、風によって引き起こされたものである。風向きが変われば枯葉の舞う方向も変わるだろうし、風が止めば枯葉は程なく地面に降りるだろう。それでは、駅に向かう人の足の動きは何によって引き起こされたのだろうか。歩行運動において、枯葉の動きにおける風の役割を演じているものは何かあるのだろうか。その人の動きをいくら仔細に観察しようと、そのようなものは見つからないだろう。そこで、自然にわれわれは、足の動きの原因をその人の心の中に求めるようになる。その人は駅に行きたいという欲求や意志や意図を持つがゆえに駅に向かって歩いているのである。その人が忘れ物をしたことに気づいたならば、その人は駅に向かうのをやめ、自宅に引き返すだろう。視点を一人称に移し変えても同じである。私が駅に向かって歩くとき、私の足は何か外的なものによって動かされているのではなく、私が動かしているのである。私は駅に行きたいと思っているがゆえに駅に向かって歩を進めているのである。しかし、人間の身体も枯葉と同じ物理的存在物である。だとすれば、人間の身体の動きも物理法則に従っているはずである。将来、脳の状態と身体状態の関係が解明されることによって、身体運動も枯葉の運動と同じように物理的な因果関係の網の目に組み入れられることになるかもしれない。われわれのこれまでの身体的行為の理解は、そうした物理的説明と整合するのだろうか。整合するとすれば、それは物理的な説明に置き換えることができるということなのだろうか。整合しないとすれば、それは最終的には捨て去ら

れるべきものということになるのだろうか。あるいは整合しないがゆえに、置き換えられることなく残ることになるのだろうか。こうした心的因果の問題は、デカルト以来、心の哲学の中心問題のひとつであり続けている。本稿では、心的因果の問題を考えるための前段として、われわれの行為理解のうちに因果の概念がどのように入り込んでいるかということを検討しておきたい。

### I 出来事因果vs. 行為者因果

タクシーを止めるために手を上げる、フライを捕るために手を上げる、質問をするために手を上げる、これらはいずれも意図的行為と見做されている。一般的見解によれば、意図的行為とは意図が原因となって生じる身体運動のことである。三つのケースを単なる手の上昇と区別するのは、それが、それぞれタクシーを止める、フライを捕る、質問をするという意図によって引き起こされた出来事であるという点にある。それに対して、レモンをかじって顔をしかめる、目の前にボールが飛んできて目をつぶる、などは意図的行為とは見做されない。それらは、レモンをかじったこと、あるいはボールが近づいてきたことが原因で生じたものである。より正確に言えば、レモンをかじったときの酸っぱさの感覚と、ボールが近づいてくるといふ視覚体験がそれぞれの身体運動を直接引き起こしたのである。その際、顔をしかめたり、目をつぶったりすることによって何かを行うことが意図されていたわけではないし、顔をしかめたり目を

つぶったりすること自体が意図されていたわけでもない。意図を実在する心的出来事と見做し、さらに、意図と身体運動の間に因果関係を見て取るこうした見解は、「タクシーを止めるために手を上げる」を「マッチをすったので火がついた」や「火山が噴火したので谷が埋まった」と類比的に理解できるとするものであり、自然主義的世界観と相性がよい。心身因果を、物理的出来事間の因果関係と同様の出来事因果の一種として扱うことができるからである。

もちろん、意図という心的出来事が存在することを疑うこともできる。たとえば、タクシーを止めようとして手を上げる人の心中に意図が存在していたとすれば、その意図はいつの時点で形成されたのだろうか。欲求や願望、あるいは、喜びや悲しみのような心的状態と違って、タクシーを止めるために手を上げる際の意図のようなものは実在しないように思われる。タクシーを止めようとして手をあげている人が持つとされる意図は、結局、その人の持つタクシーに乗りたいという欲求と、手を上げればタクシーが止まるという信念に還元されるかもしれない。しかし、他方、翌日に迫った試験のために一夜漬けをしようとしている受験生、針の穴に糸を通そうとしている人、などの心には、何らかの意図が存在しているように思われるだろう。当初、意図についての還元主義的立場に立っていたデイヴィドソンは、後に、意図の自立性を主張するようになる。意図の自立性が明白であるケースとして、デイヴィドソンは、意図が形成されたものの実行に移されない場合、行為が生じるよりはるかに前に意図が形成される場合、行為が複雑でその完遂に時間がかかる場合の三つを挙げている (Davidson, 1987, 2001)。たとえば、試験を翌日に控えた受験生は、夕食の最中、食事を終えたらすぐに勉強に取り掛かろうと思っているだろうが、それにもかかわら

ず、食後の睡魔に負けてしまうかもしれない。しかし、だからと言って勉強しようとする意図が彼にはなかったのだとは言えないだろう。また、針の穴に糸を通そうとしている人は、針の穴に糸を通そうという意図によって自らの手の動きを統制しているに違いない。

しかし、たとえ意図の自立性が否定されたとしても、それによって出来事因果としての心身因果の存在が否定されるわけではない。その場合、出来事因果論者は、初期のデイヴィドソンのように、意図ではなく、賛成的態度と信念によって構成される行為の理由が行為の原因であると主張するからである (Davidson, 1963, 1969, 1973)。タクシーを止めるために手を上げた人は、タクシーに乗りたいという欲求を持ち、手を上げればタクシーが止まると信じたがゆえに、手を上げたのであり、このように行為の理由を説明する際に用いられる「ゆえに」は、因果関係を表す語なのである。

心身因果を出来事因果の一種とするこうした見方に対しては、根強い批判がある。たとえタクシーを止めようという自立的な意図が存在し、その意図が手を上げるという行為の原因だとしても、それだけでは、「私の手が上がった」と「私が手を上げた」の違いを説明するのに十分ではないように思われるからである。タクシーを止めようという意図と私の手の上昇が因果関係で結ばれているということから帰結するのは、せいぜいタクシーを止めようと思ったので私の手が上がったということだけであって、私の手の上昇を私の行為とするには更なる何かが必要であるというわけである。そして、ある見解によれば、行為を単なる身体運動から区別するのは、それが行為者を原因とするところにある。私が手を上げるということは、私が手の上昇運動を引き起こすということであり、手の上昇運動の直接の原因は先行する意図ではなく行為者

自身なのである。ロウは、行為者を行為の原因と考えるこうした行為者因果説の支持者なら、行為の理由と行為の関係を次のように考えるはずであると言う。「行為者の信念と欲求が行為の理由を与えるとしても、信念と欲求を行為の原因と考えるならば、行為者はその理由のために行為を行ったとは言えなくなるだろう。なぜなら、理由のために行為するとは、信念と欲求に導かれて (be guided) 行為するということであって、信念と欲求によって行為が引き起こされる (be caused) というのではないからである。」(Lowe, 2002, p.204)<sup>1</sup> 行為者因果説によれば、行為とは欲求と信念が原因となって生じた身体運動ではなく、欲求と信念に導かれた行為者が遂行する身体運動なのである。行為者因果説の提唱者は、行為者因果という新たなカテゴリーを導入することによって、先行する物理的出来事や心的出来事によっては因果的に決定されない、自由な行為主体の場所を世界の中に確保しようとしたのだ、と考えられるだろう。

独裁者に向けて拳銃を発射することによって独裁者の死をもたらしたテロリストは、独裁者を暗殺したと言われる。テロリストが独裁者を暗殺したとは、テロリストが独裁者の死を引き起こしたということである。テロリストが独裁者の死を引き起こしたということは、テロリストが独裁者の死を引き起こす何事かを引き起こしたということであり、この場合は、拳銃の発射を引き起こしたということである。テロリストが拳銃の発射を引き起こしたということは、さらに、テロリストが拳銃の発射を引き起こす何事かを引き起こしたということであり、この場合は人差し指を引く運動を引き起こしたということである。それでは、テロリストは人差し指を引く運動を引き起こすためにさらに何事かを引き起こさなければならなかったのだろうか。そのようには思われまいだろう。テロリストは

単に人差し指を引いたのである。また、われわれはボールの投げ方を知っている。「ボールを投げるにはどのようにすればよいか」という問いに対しては、「振りかぶって、左足を挙げ、右手を背中へ回し、かつぎ上げた後振り下ろせばよい」と答えることができるだろう。歩くために何をすればよいかも知っている。右足を前に出した後、右足に体重を乗せ、次に左足を前に出し、それに体重を乗せ、という動作を繰り返せばよい。しかし、われわれは「右足を上げるにはどうすればよいか」という問いについては、それに答える術を知らない。人差し指を引く、右足を上げる、瞼を閉じるなどのような、基礎行為と呼ばれる行為は、それを引き起こすために他の何事かを引き起こすことを必要としないような行為であり、ボールを投げる、腕立て伏せをするといった複雑な行為を構成する、行為の最小単位と見做されるものである<sup>2</sup>。したがって、「右足を上げるにはどうすればよいか」という問いに対しては、右足の上昇を引き起こす何事かを例示することも、右足を上げるという行為を構成するような下位の行為を持ち出して答えることもできないのである。

行為者因果の存在を主張する哲学者は、基礎行為の直近の原因は行為者であると考え。テロリストが独裁者を殺したと言われるとき、「殺した」という他動詞の意味するところが、テロリストは独裁者の死を引き起こしたということであるとすれば、私が右手を上げたと言うとき、「上げた」という他動詞が意味するのは、私が右手の上昇を引き起こしたということではなければならないだろう。しかし、右手を上げることが基礎行為であるならば、私は他の何事かを引き起こすことによって右手の上昇を引き起こしたのではない。だとすれば、私は無媒介的に右手の上昇を引き起こしたのであり、右手の上昇の原因は、行為者としての私であるという

ことになるだろう。しかし、果たして、「私が右手を上げた」を「私が右手の上昇を引き起こした」と分析することができるということから、右手の上昇の原因は行為者としての私であって、私の意図ではないという結論が導き出せるだろうか。

車を運転中に、目の前の赤信号が青に変わって欲しいと思うや否や信号が青に変わるという体験を繰り返す人がいるとしよう。そのような超自然的な能力を自分が持っていると感じた人は、どのようなメカニズムによって信号が青に変わるのかを知らなくても——しかし誰が自分の手が上がるメカニズムを知っているだろうか——信号を青に変えようと単に欲するだけではなく、次第にそのことを意図するようになるかもしれない。また、その人が助手席にいる場合は、運転者の求めに応じて信号を青に変えるかもしれない。さてこの人は、信号を青に変えるために、信号を青に変えることを意図する以外に何かをしたのだろうか。信号は身体とつながっていないと言われるならば、次のようなケースはどうだろうか。右腕を失った人に、その人の意図に応じて自在に動くような義手が装着されたらとしよう。この義手は人間の腕と同様の運動機能を持つだけではなく、その人の脳状態を瞬時に把握し、さらに義手の状態を脳の体性感覚野に瞬時に伝える機能も備えているのである。このような義手を装着した人は、タクシーを止めなければその義手が上昇してタクシーを止めるだろうし、コーヒーを飲みたければその義手が伸びてカップを取ってくるだろう。では、タクシーを止めようとしたときに、その人は義手を上げたのだろうか、それともその人の義手が上がったのだろうか。その人が義手を上げたと言うべきだとするならば、その人はタクシーを止めよう、あるいは義手を上げよう、と意図する以外の何かをなしたのだろうか。また、その

人は義手を上げたのではなく、その人の義手が上がったのだと言うべきだとするならば、右手を上げることと義手が上がることの違いはどこにあることになるのだろうか。確かに、右手を上げる際に感じられるであろう筋肉の緊張感は、義手が上がるという出来事に伴うことはないだろう。それでは、「右手を上げる」と「右手が上がる」の違いも、結局単なる筋肉感覚の有無に帰着するということになるのだろうか。この例が、まだ現実性に欠けると言われるならば、次の場合を考えてみよう。寝ている間に右肩を脱臼してしまう脱臼癖のついてしまった人がいるとする。彼の一日は、目が覚めるとすぐ、右手が上がるかどうか試してみることから始まる。右手が上がらない場合は、外れた右肩の関節を左手で嵌め直すのである。ここ十日ほどは、起きてみたら関節がはずれていたが、今朝は久しぶりに自由に右手が使える朝を迎えてさわやかな気分であるところである。ところで彼は今朝、右手を上げようとして意図する以外に——あるいはこうした言い方が意図の自立性を前提していると言われるならば、右手を上げようと試みる以外に——いったい何をしたのだろうか。昨日までの十日間は手を上げようとして意図しただけなのに、今日は、手が上がるかどうか試してみようという意図によって導かれた手を上げるという行為を、行為者としての彼が遂行したのだろうか。夜毎に脱臼を繰り返す人の代わりに、夜毎に大脳皮質の運動野と右腕の筋細胞の接続が切断されるような人の場合を想像してもよいだろう。右手が上がった朝、彼は、右手が上がらなかった朝とは違って、右手を上げようとして意図する以外の何事かをなしたのだろうか。

信号と義手の場合は、答えは明白であるように思われる。彼らが行ったのは、信号を変えようとして意図することやタクシーを止めようとして意図することやコーヒーを飲もうと意図することで

ある。意図すること以外に彼らが行ったことが何かあるわけではない。意図という表現が問題だとするなら、彼らはそれぞれ、信号を変えようとし、タクシーを止めようとし、コーヒーを飲もうとしただけである。その結果として、信号が青に変わり、右手が上がったのである。それでは、第一の人は信号の色を変えたのだろうか、それとも信号の色が変わったのだろうか。また、第二の人は義手を上げたのだろうか、それとも義手が上がったのだろうか。行為者因果説の信奉者でもない限り、大方の人にとって、彼らは信号を青に変えたのであり、義手を上げたのである。たとえば、何度も助手席の人に頼んで信号を青に変えてもらった人は、そのことで彼に感謝するだろうし、向こうからやってきた友人に手を上げて挨拶をしたところ、友人の義手の上昇とともに挨拶が返ってきたとすれば、その人は、単に友人の義手が上昇したのではなく、友人が義手を上げたと解釈するだろう。ある身体運動や物理的変化が意図されたものであり、それがその意図によって引き起こされたと考えられる限り、われわれは通常は、その身体運動や変化を、意図した者の行った行為と見做すのである。

脱臼癖のある人の場合や、運動野と筋細胞の接続が切断された人の場合も同じことである。夜の中に脱臼してしまった人や神経が切断されてしまった人は、手を上げようとしたが上がらなかったのに対して、脱臼していない人や神経が切断されていない人は、上げようとしたところ上がったのである。後者にあって前者にないものは筋肉の緊張感だけであろう。このケースが興味深いのは、腕を上げることに成功した人は、通常「今朝は手が上がった」と言うだろうということである。また、右手が麻痺した後の長いリハビリの末、やっと右手を上げることができた人を見て、大方の人は「やっと彼は手を

上げた」とは言わず、「やっと彼の手が上がった」と言うだろう。いずれも、手を上げようとする意図が原因で手が上がったと見做すことができるにもかかわらず、「手を上げた」と言われることはないように思われる。「手が上がった」が「手を上げた」になるためには、それが意図を原因とするというだけでは十分ではない。手を上げようとするれば常に手が上がる状況にあるということ、行為者も行為者を取り巻く人も信じている必要がある。しかし、だからと言って、脱臼癖のある人の手の上昇が、その人の行為ではないというわけではない。腕の悪いテロリストが、一発しかない銃弾によって独裁者を狙ったところ、たまたま独裁者の心臓に命中した場合とそれは同じことだからである。いずれにしても、行為と見做される身体運動に関して、先行する意図以外に、行為者が因果的に寄与する余地があり得るようには私には思われない。

## II 行為と理由

人を殺してしまった人が、「何故あなたは人を殺したのか」という動機を問う問いに、次のように答えたとしよう。1「人々を解放したかったのだ」2「保険金が欲しかったのだ」3「つかっとなつて」4「太陽がまぶしかったから」1と2は、より詳細に「私は人々を圧制から解放したかった、そして、あの独裁者を暗殺すれば人々を圧制から解放することができると思ったのだ」あるいはまた「私は借金苦から逃れたかったのだ。夫を殺して保険金を手に入れることができさえすれば、借金を返済できると思ったのだ」と述べ直すこともできるだろう。3と4を同じような仕方では欲求と信念の対にパラフレーズすることはできない。つかっとなつて人を殺した人は、何らかの目的があったわけではないし、人を殺すことがその目的を達成

するための最良の手段だと考えていたわけでもない。人々を解放することや保険金を手に入れることとは違って、かっとなったことは、人を殺すという行為の単なる原因である。かっとなって人を殺した、と言う人は、つい殺してしまったのであって、殺そうと意図していたわけではない、と言いたいのである。「何故あなたは人を殺したのか」と問うかわりに、「何故あなたは人を殺そうと思ったのか」と問うならば、より状況が鮮明になるかもしれない。1と2の人はやはり、「人々を解放したかったのだ」「保険金が欲しかったのだ」と同じ答えを繰り返すだろう。それに対して、3の人は「私は決して殺そうと思ったわけではない、かっとなってつい殺してしまったのだ」と答えるだろう。たとえば、彼が、鈍器で人の後頭部を殴れば通常人は死ぬだろうことを知りつつ鈍器で人を殴ったとしても、やはりそう答えるだろう。

4は特殊な答えである。これを次のような答えが返ってくる場合と比較してみよう。5「小惑星の衝突が怖かったのだ。あの人を殺せば小惑星が地球に衝突することを防ぐことができると思ったから殺したのだ。」この答えは常軌を逸していると同時に、ある意味で合理的でもある。われわれは、日々、小惑星の衝突に恐れを抱きながら生活することはない。また、ある人の存在と小惑星の衝突の間に何らかの関係があるという信念を持つこともない。この人物の恐怖が、われわれが恐怖を抱くような状況ではないような状況で生じたものである点で、また、彼の考える恐怖とその解消手段の関係がわれわれの理解を超えているという点で、この人物の答えと行動は常軌を逸している。しかし、この人は、ある欲求を持ち、その欲求を満たすためにある行動を行ったのである。彼の行動には理由があるのであり、その意味において彼の答えと行動は合理的である。「太陽がまぶしかったから」と

いう答えは、5に比べて常軌を逸しているようには思われなくても、5には見られる合理性をまったく欠いている。4の人間には、逸脱すべき規範がそもそも存在しないのである。「太陽がまぶしかったから」という答えが単なる自己韜晦ではないとすれば、われわれには、そのように答える人間の行動を通常の間人を理解するように理解することはできない。如何に有能な作家であっても、常に理由なしに行動する人物を描きだすことはできないだろう。その人物の身体運動を行為として描くことができないからである。そのような人物が存在したとしても、われわれはその人物を理性に従って行動する存在と見ることはできないだろうし、一人の人間存在として見ることもさやがてはしなくなるかもしれない。結局、ムルソーも、恋人ともう少し一緒にいたいと思って彼女を食事に誘い、たばこを吸いたいと思ってたばこを買いに街に出て行くのである。

しかし、行為の理由が明らかになった時点で、行為についての問いが打ち止めになるとは限らない。タクシーを止める、ビールを取ってくるといった日常的な行為と違って、それがその後の生活が激変するような結果をもたらすような行為である場合には、動機が明らかになった後でも、何故そのようなことをしたのかという問いが問い続けられることがあるだろう。たとえば、2のように答えた人は、「保険金が欲しいからといって、何故あの時夫を殺してしまったのか」と自問し続けるかもしれない。また、彼女の取り調べに当たった人は、動機が解明された後でもやはり「借金に困っているからといってなにも夫を殺すことはなかつただろう」と問い詰めるだろう。この問いは、何についての問いであり、どのような種類の答えを求める問いなのだろうか。

差し当たっての答えとしては次のようなもの

が考えられるだろう。「あの時は思慮に欠けていたのだ。後のことをもっとよく考えていたならば、夫を殺すこともなかっただろうに。」これは、行為に至る意図が形成される過程において、自分は十分に理性的ではなかったと認めるということである。また、「あの時の自分に他にどうすることができたというのか」と答えた人は、現在の自分であっても、あのような状況であれば同じことを考えただろうし、同じ行動をとっただろうと言っているのである。しかし、このような答えが与えられた後も、やはり次のように自問することがあるだろう。「何故自分は思慮に欠け、ある欲求に振り回されるような人間であるのか。」「何故自分はあのように考え、あのように行動する人間であるのか。」また、第三者は次のように問うだろう。「借金苦だからといって何故殺そうなどと思ったのか。」「殺そうと思ったからといって何故本当に殺してしまったのか。」それぞれの問いのうち、前者は、何故あのような状況においてある欲求を抱いたのか、あるいは、何故あの時、複数の競合する欲求のうち、ある特定の欲求が他を圧倒するまでに肥大したのか、という問いである。たとえば、自分は金が欲しいと思うと同時に、平穏な暮らしがしたいとも思っていた。それが、何故あの時に前者の欲求が後者を凌駕してしまったのだろうか、というわけである。後者は、何故自分はある理由に従って行為したのか、という問いである。自分には夫を殺す理由があったとしても、何故その理由に従って実際に夫を殺したのだろうか。これは、「何故火が点いたのか」ではなく、「何故マッチを擦ると火が点くのか」という問いに類比的である。それは、行為の原因についての問いではなく、特定の理由と特定の行為の間の因果関係が何故成り立つのかという問いであるからである。「自分は何故あの時あのような欲求を抱いたのか」、「自分は何故あの時あ

ような理由に従って行動したのか」等と問うことは、「自分がどのような欲求を抱く傾向にある人間であり、どのような理由の下で行動する人間であるのか」と問うことであり、それらはいわば超越論的問いなのである。

このような超越論的問いに対する答えは、行為の理由を問う問いに対する答えとは異なった種類のものである。犯罪の動機が不可解な場合、精神鑑定が行われることがある。精神鑑定によってわれわれが知ることを期待しているのは、どのような実践的推論によって犯罪者が犯罪行為に至ったかということであるよりも、何故犯罪者がそのような推論をしたのか、ということであり、言い換えれば、推論の前提となる欲求を何故抱いたのか、そしてその欲求が何故肥大してしまっただけなのか、ということであるように思われる。したがって、精神鑑定の結果は、犯罪者の行為を合理化するようなものではなく、その人物の心理的構造を明らかにするような種類のものであるだろう。それは、たとえば、人格障害や発達障害などのカテゴリーの下にその人物を分類することであるかもしれない。そして更なる原因として、幼児期の体験や、脳の病変が持ち出されるかもしれない。幼児期の体験は、ある人物の心的構造が形成された原因——ドレツキの用語に従って構造化因 (structuring cause) と呼ぶこともできるだろう<sup>3</sup>——を与えてくれるものと見做されているのだろうし、脳の病変は、心的構造が構成される基盤を提供していると思われているのだろう。

「自分は何故にこのような人間であるのか」と問うときに求められているのも、精神鑑定に求められているものと同じ種類の答えであろう。行為の動機についてならば、いわゆる一人称的特権が存在する。殺人が保険金目当てであったことを直接知るのは彼女だけであり、しかもそのことを知るために彼女は改めて内省してみる

必要もない。それに対して、上のような問いについては、一人称の特権は存在しない。自分がこのような人間であることは、自分が意図的に生じさせた出来事や状態ではないからである。したがってまた、自分がこのような人間であることを合理化するような理由を本人が持ち合わせていることもない。「自分は何故にこのような人間であるのか」という問いに答えるには、内省は十分ではないし不可欠でさえない。この問いに答えるためには、比喩的に言えば、自己の外に出なければならぬのである。ある人物がある特定の欲求を抱きやすいこと、またある特定の理由に従って行動する傾向を持つことの説明は、たとえばその人の幼児期の体験によって与えられるかもしれないし、また、海馬体が肥大しているといったように、その人の脳状態によって与えられるかもしれないが、そのような解答によって自己理解や他者理解が深まったと感じているとするならば、それは、われわれが求めていたものが、ある行動を合理化してくれるような説明ではないということの証左となるだろう。

結局、われわれは次のような人間観を抱いているのである。すなわち、人間はそれぞれ異なった心的構造を持っている。同じ状況下でも、ある者が抱く欲求と別の者が抱く欲求は別であることがある。ある者はある理由に従って行動し、別の者は別の理由によって行動をする。しかし、人間は千差万別であっても、その行為には共通性がある。それは、それが合理的な理由によって引き起こされる身体運動であるということである。われわれは、目的とそれに到達する手段を勘案しつつ自らの身体を運動させている存在なのである。それゆえ行為についての問いも二重になる。何故ある行為をしたのかと問うとき、われわれは行為者に行為の合理化を求めている。それに対して、何故そのような欲求

を持ち、そのような理由の下で行動したのかと問うとき、われわれが知りたいと願っているのは、行為者の心の構造なのである。

われわれは、自分がどのような欲求に導かれる人間であるかということを選び取ることはできない。われわれは、意図的に手を上げたり、眼を閉じたりすることはできるし、意図的にジョージ・ブッシュの顔を思い浮かべることができるが、意図的にジョージ・ブッシュを好きになったり、意図的にたばこを嫌いになったりすることはできない。われわれには、自分の身体を動かすような仕方での自分の心的構造を作り変えることはできないのである。しかし、人間が自らの心的構造の構造化因としての効力をまったく持っていないというわけではない。たとえば、たばこは体に悪いから何とかして禁煙しようと思いつつ、他方ではたばこを吸いたいという断ちがたい欲求に苛まれている人は、たばこを吸い続けた末に健康を害してしまった未来の自分の姿を想像したり、たばこを身辺から遠ざけたりすることによって、たばこをやめたいという欲求を増進させ、たばこを吸いたいという欲求が生じる機会を減じようとするだろう。このようにして禁煙に成功した人は、自らの心的構造を変えたと言えるだろう。しかし、それは自分の身体の位置を変えるように直接的に変えたのではなく、あくまで間接的な仕方によって変えたのである。また同じような仕方でも他人に働きかけることもできる。自分の子供に、勉強ができる人間を待ち受ける幸福な未来と、勉強ができない人間を待ち受ける悲惨な未来を語り聞かせることによって、子供が常に勉強しようという欲求によって突き動かされる人間になった場合がそうである。もちろん、精神療法や薬物療法、あるいは外科的療法によって心的構造に介入する場合もあるだろう。

一方、「火事だ、逃げろ」「いいレストランが

あるから食べに行こう」などと言うことは、相手の心中に特定の行動への動機を生み出そうとすることである。われわれはこのようにして、物理的接触によらずに他者の行動に影響を与えることができるかと信じている。それは、人間の行動が、先行する物理的状态だけではなく、行為者の欲求と信念によって引き起こされているとわれわれが信じているということであり、また、人間が共有する合理性の規範に則って行為者の信念に働きかけることができるかと信じているということである。行為の理由が行為の原因でもあるということ、そして、人間が共通の規範に従って推論し行動するということをわれわれが信じているのでなかったならば、非物理的手段で相手に働きかけようとわれわれが試みることは決してなかっただろう。

### Ⅲ 心的行為

単なる身体運動と行為が区別されるように、単なる心的出来事と心的行為を区別することもできるだろうか。新聞の国際面を読んでいる最中にジョージ・ブッシュの顔が思い浮かぶこと、人に侮辱されて怒ること、突然犬にほえられて驚くこと、同窓会で会った人の名前を思い出そうとすること、ベッドで羊の数を数えること、買い物の代金を計算すること、行為の因果説について考えることの間には直観的な違いがあるように思われる。前者はある刺激が原因となって生じた心的出来事であるのに対して、後者は特定の意図が介在することによって引き起こされた意図的な出来事であるように思われるだろう。しかし、身体的行為に比べて心的行為は多岐にわたり、問題も錯綜している。人の名前を思い出そうとすることと、金額を計算することと、哲学の問題を考えることとの間にも顕著な違いがある。

名前を思い出そうとすることと名前を思い出そうと意図することは同じことである。名前を思い出そうとしている人は、名前を思い出そうと意図したことが原因で名前を思い出そうとしているわけではない。この場合は意図することがすなわち行為することでもあるような特殊なケースである。しかし、名前を思い出そうとしてアイウエオ順に文字を組み合わせて名前を作ってみる、小学校の名簿を順番に思い浮かべてみる、などのことをする場合はそうではない。アイウエオ順に文字を組み合わせている人に、「何故あなたはそのようなことをしているのか」とたずねるならば、その人は、「先ほど会った人の名前を思い出そうとしているのだが、文字を適当に組み合わせているうちにその名前に当たるかもしれないと思ってやっているのだ」と答えるだろう。文字を組み合わせるという心的出来事は、名前を思い出そうとする意図の下に始められた心的行為なのである。

それでは、意図することは意図的な心的行為なのだろうか。意図を行為の原因とする行為の因果説に対して、意図することが意図的な心的行為ならば、それを引き起こす意図が存在しなければならず、そのためにはそれを引き起こす更なる意図がなければならず、結局のところ無限背進に陥ることになる、といった批判がなされることがある。しかし、たとえばベンツを買うことを決断した人は、ベンツを買うことを決断しようという意図によってベンツを買うという決断を引き起こしたのだろうか。そうではないだろう。その人は端的にベンツを買う決断を下したのである。もちろん彼は、他の車との比較や、ふところぐあいとの相談をした後に決断したのであり、さらには、ベンツにしようかカローラにしようかと迷ったあげく、今が決め時だと思って大奮発する決断をしたのかもしれない。また、彼はベンツを買おうと思って契約書

にサインしたのである。しかし、彼はベンツを買おうと決断しようと思ってベンツを買おうと決断したのではない。意図することも決断することと同じであろう。タクシーに乗ろうという意図を持つ人は、タクシーに乗ろうという意図を形成しようとして意図することによってタクシーに乗ろうという意図を持つに至ったわけではない。8時の電車に乗ろうと思い、タクシーに乗らなければ8時までに駅に着くことができないと考えたがゆえにタクシーを拾おうと思ったのである。

金額を計算する場合や哲学的な問題を考える場合はより複雑な問題が生じてくる。80×25を計算している人の場合を考えてみよう。「何故あなたはそのようなことをしているのか」と問われたならば、その人は、たとえば、「80円切手を25枚買ったのでいくらになるか計算しているのだ」と答えるだろう。その人は、暗算を行っている理由を述べているのである。その人が80×2を計算中に同じ問いを受けたならば、80×25を計算する際の計算規則を持ち出して答えるかもしれない。「80×25の計算をするには、80×5を計算した後80×2を計算し、それを先ほどの答えの10の位に足せばよいのだ、そして私は80×5を今しがた計算したところなのだ」というように。さらに、2000という結果が出たときに、あなたは何故そのように考えたのかと問われれば、やはり、計算規則を持ち出して答えるだろう。では、オランダに隠棲して思索にふけているデカルトに、「あなたは何故考えごとをしているのか」とたずねるならば、デカルトはどう答えるだろうか。おそらく彼は、「私は一生に一度すべてを根こそぎに覆し、最初の土台から学問を新たに始めたいと願っていたが、今やっと閑暇を手に入れたので、今こそそれに取り掛かる時期だと思ったのだ」と答えるだろう。こう答えることによって、彼は思索を始め

た理由を述べているのである。また、デカルトが「私は考える、ゆえに私は存在する」という考えに思い至ったときに、「あなたは何故そのようなことを考えているのか」と問うならば、彼は、第一省察と第二省察の前半部分の内容を語りだすだろう。その時、彼は推論の論理的連なりを提示することによって「私は考える、ゆえに私は存在する」という考えに至った理由を述べているのであり、そうすることによって、「私は考える、ゆえに私は存在する」という思考内容を正当化しているのである。それはまた、「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えるという心的行為を正当化することでもある。「私は考える、ゆえに私は存在する」という考えが理にかなったものであるならば、適切な思考過程の後に「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えることも理にかなっているからである。ところで、行為の因果説が心的行為にも妥当するとするならば、思索を始めた理由は思索を始めた原因である。デカルトは、一度すべてを根こそぎにしようと思い、すべてを根こそぎにする心的作業に取りかかったのである。しかし、たとえば、「悪霊が私を欺いていると想定したとしても、そう想定している私は存在する」ということが、「私は考えている限り存在する」ということを正当化し、したがって、「悪霊が私を欺いていると想定したとしても、そう想定している私は存在する」と考えることが、「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えることを正当化するとしても、はたして、前者のように考えたことは、後者のように考えたことの原因となっていると見做すことができるだろうか。

思考中に次の思考内容の生起を意図することはできない。なぜなら、われわれは未来の思考内容を予測することはできないからである。80×25を計算するといったような、規則を適用するだけの心的行為の場合ならば、「今80×2を

計算しているのは、私が $80 \times 25$ の値を求めたいと思っており、そのためには $80 \times 5$ を計算した後には $80 \times 2$ を計算すればよいということを知っているからだ」という言い方は、 $80 \times 2$ を計算していることの理由を与えることによって、その原因も与えていると言うことができる。手を上げている人が、「今手を上げているのは、タクシーを止めたいと思っており、そのためには手を上げればよいということを知っているからだ」ということによって、手を上げている理由と原因を与えているのとそれは同じことである。計算している人も手を上げている人も、目的を達成するために何をなすべきか知っていると思っており、そのなすべきだと信じている事を行っているのである。その意味において、計算は行為の構造としては、身体的行為と同じ型に属する。しかし、哲学の問題を考える、小説の構想を練る、作曲をする、といった創造的心的行為の場合はそうではない。一度すべてを根こそぎにし、知の基礎となるような堅固な地盤を見出したいと欲したデカルトは、その欲求ゆえに思索を始めたのだとしても、その際に「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えることが意図されていたわけではない。もし、思索を開始するに当たってそのような意図が存在していたとすれば、改めて長い思索にふける必要はないだろう。同じ理由で、思索の始まりだけではなく、思索のどの段階においてもそのような意図は存在しなかったはずである。「私は考える、ゆえに私は存在する」という考えは、意図によって引き起こされたのではなく、生起したのである。しかし、それは、侮辱によって怒りがこみ上げてくるような仕方で生起したわけではない。侮辱した相手に対する怒りは、侮辱されたという信念が原因となって生じたものであり、侮辱されたという信念に対する一種の反応であるのに対して、一連の思考行為の間に刺激と反

応のような関係があるようには思われない。

また、ある思考は、何の脈絡もなく生じてくることもある。たとえば、ある日、ある人の心中に「私は考える、ゆえに私は存在する」という考えがふと浮かぶことがあるかもしれない。長い思索の過程で生じる場合とそれほど違ってくるのだろうか。そして、意図が思考内容を引き起こしたのではないとするなら、創造的心的行為において意図の果たす役割とは如何なるものなのだろうか。

デカルトにおける思考の生起を単なる心的出来事から区別するのは、心的緊張感のような現象学的特質ではないだろう。思考の生起をひとつの心的行為たらしめる本質のようなものがあるとすれば、それは、それが正当化の文脈を持つということであるように思われる。「あなたは何故そのようなことを考えたのか」という問いに対して、そのような考えが生起しただけの人は、「理由はない、ただ思い浮かんだだけだ」とでも答える他ないだろう。そしてまた、一連の思考は、意図によって引き起こされたのではないものの、やはりある意味において意図されていたものであり、目指されていたものである。デカルトの思索の目的が、知の基礎となる堅固な地盤を見出すことであり、「私は考える、ゆえに私は存在する」という命題がそれであるとすれば、「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えることも、デカルトによって目指されていたのである。

創造的心的行為は行為の中でひとつの特殊なカテゴリーを形成している。それが、ある意図の下に、あるいはある主題を巡って始められたものであるという点において、また正当化の文脈に置かれるという点において、それは他の行為と類似しているが、意図の役割も、正当化の構造も通常の行為の場合とは異なっている。二節で触れたように、通常の意図的行為の場合、

行為の理由を問う問いと、行為の意図を形成するに至った理由を問う問いに対する答えは同じものである。「私は人々を解放したかったのであり、あの独裁者を暗殺すれば人々を解放することができると思ったのだ」という答えは、「何故あなたは独裁者を暗殺したのか」という問いに対する答えともなり得るし、「何故あなたは独裁者を暗殺しようと思ったのか」という問いに対する答えともなり得る。行為の理由が行為を正当化するのは、それが行為の原因となる意図を正当化するからである。しかし、思考の場合はそうではない。コギト命題を考えているデカルトが、その理由として、たとえば次のようなことを言うことはないだろう。「私は哲学の基礎を築きたいと欲しており、「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えれば基礎を築けると考えたので、「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えようと思い、それゆえ「私は考える、ゆえに私は存在する」と考えたのだ。」デカルトは、コギト命題を考えることが理にかなっていると考えたがゆえにコギト命題を考えたのではない。したがって、コギト命題を考えることが理にかなっているのは、コギト命題を考えようと思うことが理にかなっているからでもない。先に述べたように、思考行為が合理的であるのは、先行する意図が合理的だからではなく、思考内容が合理的だからである。思考という心的出来事の正当化がなされるとすれば、それは思考が生起した後に、思考内容の正当化を通して事後的になされるのである。創造的心的行為における意図の主たる役割は、結局のところ、特定の思考を引き起こすことにはなく、生起した思考を正当化の文脈の中に位置づける作業を統制することにある、ということになるだろう。

以上のような行為の分析は概略的なものである。特に心的行為に関しては手付かずの問題が

多くある。小説の構想を練ったり作曲をしたりといった、より規範性の少ない行為を、哲学的思考と同列に論じることはできないかもしれない。また、心的行為における意志の弱さとはどのような事態なのだろうか。考えをある主題に集中しようとしても、脈絡のない考えが浮かんでくるような人が意志の弱い人であり、意志の強い人とは、意志によって、思考の生起を制御することができる人なのだろうか。すると、意図は心的行為においても、十全なものではないとしても、やはり一種の作用因として働くということなのだろうか、それとも生起する思考の連鎖を規定するという意味で、それは構造化因として働いているのだろうか。これらは、今後に残された解決されるべき課題である。

#### 注

- 1 ロウ自身は、出来事でも行為者でもなく、実体を因果関係の項と見做す実体因果 (substance causation) を提唱している (Lowè, 2003)。
- 2 基礎行為の概念に最初に思い至ったのはおそらくマルブランシュであろう。マルブランシュは『真理の探求』のなかで次のように言っている。

人間は塔を倒すことはできないにしても、少なくとも、それを倒すためにはどうすればよいかを知っている。しかし、動物精気によって自分の一本の指を動かすにはどうすればよいかを知っている人は一人もいない。したがって、どのようにして人々は自分の腕を動かすことができるのだろうか。(Malebranche, 1979, p. 649)

マルブランシュは、以上のような考察から、運動の真の原因は神の意志であり、人間の意志は機会原因に過ぎないとする機会原因論を導き出すのである。

- 3 ドレツキ (Dretske, 1988, 1993) は、誘因 (triggering cause) と構造化因の区別を次のような例によって説明している。スクリーン上のカーソルが動くのは、オペレーターがキーボード上のキーを押したからである。キーを押すとカーソルが動くのは、キーを押すとカーソルが動くようにコンピューターが設計されているからである。この場合、キーボードを押す

という出来事が、キーボードの運動の誘因であり、キーボードを押すとカーソルが動くようにコンピューターを設計したことが、キーボードの運動の構造化因である (Dretske, 1993, pp.121-122)。

#### 文献表

- Davidson, D. 1963, "Actions, Reasons, and Causes", in Davidson, 1980.
- Davidson, D. 1969, "How is Weakness of the Will Possible", in Davidson, 1980.
- Davidson, D. 1973, "Freedom to Act", in Davidson, 1980.
- Davidson, D. 1980, *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press. (『行為と出来事』、服部、柴田訳、勁草書房。ただし、Davidson, 1973は収録されていない)
- Davidson, D. 1987, "Problems in the Explanation of Action", in Davidson, 2004.
- Davidson, D. 2001, "L'action" in *Quelle philosophie pour le XXIe siècle ?* Gallimard/Centre pompidou.
- Davidson, D. 2004, *Problems of Rationality*, Oxford University Press.
- Dretske, F. 1988, *Explaining Behavior*, MIT Press.
- Dretske, F. 1993, "Mental Events as Structuring Causes of Behaviour", in Heil, J. and Mele, A. (eds.) 1993.
- Heil, J. and Mele, A. (eds.), 1993, *Mental Causation*, Oxford University Press.
- Lowe, E. J. 2002, *A Survey of Metaphysics*, Oxford University Press.
- Lowe, E. J. 2003, "Personal Agency", in O'Hear, (ed.) 2003.
- Malebranche, N. 1979, *De la recherche de la vérité, Œuvres I*, éd. Établie par G. Rodis-Lewis, Gallimard, 《La Pléiade》.
- O'Hear, A. (ed.) 2003, *Minds and Persons*, Cambridge University Press.